

■ はじめに ■

近年、医療機器の進歩は目覚ましく、特に画像診断領域ではCT、MRI、核医学、PET、超音波検査など、それぞれで機器の革新や新たな技術の導入が進んでいます。しかし胸部X線検査は20世紀初頭から診断法としての地位を確立し、現在においても簡便かつ低侵襲で、多くの情報が得られる非常に有用な検査であることには変わりありません。その読影は研修医にとって必須事項であるばかりか、将来的にどの診療科に進んでも必要です。しかし多くの研修医は、胸部X線写真の読影技術向上に関心をもっているにもかかわらず、基本的な読影方法やコツを身につけられないまま、苦手意識を抱き続けています。

筆者は2004年の新医師臨床研修制度開始当初から研修医指導に従事し、これまで数多くの病院で研修医を対象にセミナーを行ってきました。また2022年からは葉山ハートセンターでのウェビナー講演（葉山Radiology Conference）を開始し、これらを通じて研修医がどこでどのようにつまづき、何が理解できないのかを把握することで、研修医指導のノウハウを蓄積してきました。

画像診断を苦手とする医師に共通することは、臨床的知識や経験の量に関係なく、“画像の見方”を理解していないことです。例えば、画像診断の教科書の多くが“診断名”→“画像所見”の流れで記述されていますが、実際の臨床現場では“画像所見”から異常所見を拾い上げ、鑑別診断を行うといった思考回路が必要となります。また疾患を理解するためには、病態生理はもちろんのこと、正常解剖や“画像の基本原則”の理解も必須です。本書では、胸部X線写真読影の基本を学び、画像からどのように所見を拾いあげるのか、画像所見から何を考え鑑別診断をあげていくのかを、放射線診断専門医の立場から解説します。

また胸部X線写真の読影を学びたい読者の足がかりとなるよう、特に研修医が、救急外来や病棟業務などの日常診療で困らないレベルで画像診断を行えるようになることを目標とし、臨床現場で本当に役に立つ必要最低限のエッセンスをわかりやすく解説しました。さらに、葉山Radiology Conferenceでも大切にしている「診断のストーリー」を重視した構成としました。主に研修医を対象とした内容になっていますが、後期研修医や研修医を指導する立場の医師、放射線技師や看護師などのメディカルスタッフをはじめ、どなたにも役に立つ1冊になったと自負しております。本書が皆様方の診療の一助となれば幸いに存じます。

本書の特徴

- ① 豊富な症例・画像と、初学者向けの丁寧な解説
- ② 異常所見をいかに拾い上げ、見落としを防ぐかを解説
- ③ 異常所見を理解するために必要な、正常解剖や画像の基本原則を解説
- ④ 画像診断で用いる用語の意味や正しい使い方を解説（プレゼンテーションにも対応）
- ⑤ 研修医がよく遭遇する、絶対に知っておきたい・見落としはいけない疾患を多数掲載

「みんなの知りたい！がこの1冊に」

2024年9月

葉山ハートセンター 放射線科 部長・画像診断センター長 田尻宏之